

小説の時代の物語詩： レールモントフ『ムツイリ』における二つの「真実」

菅原 彩

はじめに

本稿で考察対象として取り上げるのは、M. Ю. レールモントフの後期⁽¹⁾の代表作の一つ、物語詩『ムツイリ Мцыри』(1838-1839)である。『ムツイリ』は「ロマン主義的物語詩 романтическая поэма」と呼ばれるジャンルに属しているが、このジャンルは1820年代から1830年代前半のロシアで人気を誇ったものの、1835年にはすでにB. Г. ベリンスキーによって「何か陽気で、しかしずっと以前に過ぎ去った時代についての思い出」と呼ばれていた⁽²⁾。『ムツイリ』が書き上げられたのは、小説の時代が本格的に訪れようとしていた時期に当たる。

これまで、ジャンルのブームを過ぎて書かれた『ムツイリ』には、モノログを中心とする物語詩の伝統の完成、という意義は与えられてきたが⁽³⁾、そこに新しさはあまり認められてこなかった⁽⁴⁾。このような『ムツイリ』の評価は、研究者の関心が主として、作品の大半を占める主人公ムツイリの告白に向けられてきたためと考えられる。例えばV. P. フォフトは、「お決まりの筋、詳細で熱情的なモノログ、緊張、体験の誇張、激しく強い意志を表すイントネーション」などを挙げて、「これら全ては、まさしくロマン主義的物語詩の決定的な特徴である」としている⁽⁵⁾。そこで本稿では告白だけでなく、冒頭二連の語り手による導入部にも光を当てることで、この作品の持つ従来の物語詩にはない新しさを取り出してみたい。

先行研究の中にも、告白に加えて導入部の考察を行っているものはあるのだが、その場合も、導入部第1連で示される物語の舞台グルジアの運命と、その後語られる主人公ムツイリの運命の対比を理由に、この作品はA. С. プーシキンの『カフカースの虜 Кавказский пленник』(1820-1821)や、E. A. バラトウインスキーの『エダ Эда』(1824-1825)など、同様の対比が見られる物語詩の流れを汲むものとされてきた⁽⁶⁾。

『ムツイリ』はたしかに、構成面では先行作品の伝統を受け継いでいる部分もある。だがそればかりではなく、導入部における語り手と告白を行う主人公が異なる価値観に立っており、二つの語りが対置されている点こそが重要だと思われる。なぜならまさにこの点に、伝統的な物語詩にはない『ムツイリ』の新しさと独自性が現れているからだ。とりわけ注目したいのは、こうした語りの特徴とレールモントフの後期創作、特に彼の小説『現代の英雄 Герой нашего времени』

(1838-1839)に見られる特徴との関連性である。というのも、複数の「真実」が対置されるといいう『ムツイリ』の多重化した語り^{のあり方は}、『現代の英雄』へ、そしてより視野を広げて考えるならば、「世界が主として様々な声と視点を通して提示される」⁽⁷⁾ことを可能にする小説というジャンルへとつながるものだからだ。そこで本稿ではこうした語り手と主人公の価値観の違いに注目し、この物語詩の文学史的位置づけを再考すると共に、レールモントフの創作史においてこの作品の持つ重要性を指摘したい。

本稿ではまず、ムツイリによる告白と彼の生涯が語られる導入部第2連を対比的に取り上げ、その後グルジアについて語られる導入部第1連の検討を行う。特に着目するのは、語り手と主人公の価値観の相違がよく表れていると思われる、境界としての壁の形象である。さらにこうした考察によって明らかになった、『ムツイリ』の語りにおける複数の「真実」の対置というあり方が、レールモントフの他の後期創作につながる重要な特徴であることを論じ、先行する物語詩や『現代の英雄』との比較のなかで、『ムツイリ』の内に、後期の小説に通じる要素を見いだしていくことにしたい。

1. 『ムツイリ』における語り手と主人公の語りの対置

最初に、導入部第2連で伝えられる主人公の生涯について、簡単にまとめておこう。主人公は山岳民の出だが、幼い時に捕虜となって故郷から連れ去られ、その旅の途中で病に倒れる。修道士に命を救われ、修道院で育った少年は修道士見習い(ムツイリ)となるが、ある夜とつぜん逃亡し、3日後に瀕死の状態^{で倒れているところを}発見される。そして修道院に連れ戻された彼は、最期に修道士に向かって告白を始める。続く第3連から最終連(第26連)に至るまで彼の告白が展開していくのだが、語り手による導入部第2連と主人公の告白という二つの語りの差異を考えると、大きな手がかりとなるのは、そのどちらにも現れる修道院の形象である。なぜなら語り手と主人公の語りでは、同じ修道院が違った評価のもとに描かれているからだ。

実際、第2連と告白では、修道院の形象は全く異なるものとなっている。病で死にかけた主人公を保護した修道院を、語り手が「庇護の壁 *хранительные стены*」とみなすのに対して、主人公はそこで命を救われたにもかかわらず、くり返し「牢獄 *тюрьма*」と呼ぶ。その他にも「薄暗い壁 *сумрачные стены*」、ムツイリの苦しみに無関心な「声を通さぬ壁 *глухие стены*」など、告白の部分では修道院は一貫して否定的に描かれている。こうした対照的な修道院の形象を考えるにあたって重要になるのが、修道院が具体的に描写されず、ただ抽象的な壁、つまり外の世界と内を隔てる境界として提示されていることである⁽⁸⁾。

境界の持つ特質について、A. E. マホフは「境界、境は、人を優しくととのえ、彼の居場所を世界の中に定義することもできるが、彼を閉じ込め、制限することもできる」[強調原文]とその両義性を指摘し、「家の境界は牢獄の境界に変わりうる——全ては [...] 境界の観念そのもの

への我々の態度いかんによる」と述べていた⁽⁹⁾。『ムツイリ』でも対照的な修道院の形象は、語り手と主人公の壁に対する態度の違いに起因すると言えるだろう。壁を語り手は守るもの、主人公は制限するものとして見ているのである。では主人公の告白において、修道院の「壁」はどのように捉えられているか、という点をまず考察してみよう。

1-1. 主人公の告白：「牢獄」としての修道院

主人公にとって修道院の壁が制限するもの、つまり「牢獄」であるとすれば、外の世界にあり壁が隔てているものとは何だろうか。壁の内に欠けているものとしてまずムツイリが挙げるのが、「不安と闘い」である。彼は「そこでは人々は自由だ、鷲のように Где люди вольны, как орлы」(472)⁽¹⁰⁾という「不安と闘いのあの妙なる世界 тот чудный мир тревог и битв」(472)を渴望する。また、壁の内には故郷の肉親もいないため、ムツイリは孤独に苦しめられ、「私は誰にも言えなかったのだ／「父」、「母」という聖なる言葉を Я никому не мог сказать / Священных слов «отец» и «мать»」(472)と嘆く。そして、父母でなくともせめて故郷の誰かに出会うことを願い、「いつの日かたとえ一瞬でも／私の燃えるような胸を／愁いをこめて誰かの胸に押しあてよう、／なじみはなくとも懐かしい胸に Хотя на миг когда-нибудь / Мою пылающую грудь / Призвать с тоской к груди другой, / Хоть незнакомой, но родной」(472)と心に誓うのだ。

ただし修道院でムツイリが孤独なのは、故郷の人々がいないためばかりではない。「不安と闘い」が欠如している修道院では、ムツイリの渴望を分かち合える存在もないのだ。このことは、彼が修道院から逃げ出す場面に見てとれる。「雷雨があなた方〔修道士たち〕を怯えさせていた時 Когда гроза пугала вас」(475)に、ムツイリは修道院から嵐の中へと駆けていき、嵐との「短い、生き生きとした友情 дружба краткая, но живая」(475)を喜んでいる。嵐に怯える修道士たちの姿は、ムツイリとは著しい対照をなしており、彼らがムツイリを理解できないことは明らかだ。このように修道院の壁は、ムツイリを「不安と闘い」に満ちた世界から隔絶するだけでなく、彼を故郷の人からも理解者からも引き離し、絶対的な孤独の内におくのである。

一方、修道院の外は壁の内側とは異なって、全てが仲間を持つ世界である。そこでは木々は「輪踊りをする兄弟たち братья в пляске круговой」(473)に喩えられ、星々は輪舞を楽しむ。Ю. В. Манが指摘するように、外の描写では「2」という数が多用されており、小屋や山、川など様々なものが対となっている⁽¹¹⁾。そして、二者は時として互いに抱擁しようとするのだが、ムツイリもまた、外の世界で嵐との抱擁を願い、森で遭遇した豹と激しく闘う中で抱き合う。

これらの場面において興味深いのは、修道院に欠けていたものを体現する存在として、嵐と豹が描かれていることである。例えば激しい嵐は「不安と闘い」を象徴するものであり、同時に、ムツイリにとっては彼を理解しその渴望を共有してくれる存在でもある。そのためムツイリは、「荒れ狂う心と雷雨との間の／短い、生き生きとした友情 дружба краткая, но живая, / Меж бурным

сердцем и грозой」(475)を感じ、「おお、兄弟のように／嵐と抱き合えたならどれほど嬉しかったか！ О, я как брат / Обняться с бурей был бы рад!」(475)と、嵐との抱擁を夢見るのだ。

豹との抱擁でも同様に、「不安と闘い」の渴望が満たされると共に孤独も癒される様が見て取れる。ムツイリは森で豹と激しく闘うが、闘いの中で彼らは互いに似通ってくる⁽¹²⁾。攻撃を受けた豹が「人間のように呻いた застонал, как человек」(482) 一方で、ムツイリもまた豹に近づいていく。

Как барс пустынный, зол и дик,	荒野の豹のように、私は敵意に満ち獯猛で
Я пламенел, визжал, как он;	激し、金切り声を上げた、彼のように。
Как будто сам я был рожден	まるで私自身、森の爽やかなとばりの下で、
В семействе барсов и волков	豹や狼の家族の中に
Под свежим пологом лесов.	生まれたかのようにだった。

(482-483)

豹のように金切り声を上げたムツイリは、「豹や狼の家族の中に／生まれたかのようにだった」と感じている。そして共に「不安と闘い」を生きる中で類似性をあらわにしたムツイリと豹は、「二人の友人以上にかたく抱き合って Обнявшись крепче двух друзей」(482)と、友人同士にもなぞらえられるのだ。家族、友として豹と抱き合うことは、「なじみはななくとも懐かしい胸」と抱き合いたいという願いの実現とも言えるだろう。さらにムツイリは闘う自分を勇敢な戦士である故郷の人々の姿に重ね合わせ、「父祖の土地で私は／はしくれでない勇者になれただろう быть бы мог в краю отцов / Не из последних удальцов」(482)と彼らとの近しさを実感するのだ。

このようにムツイリは壁の外に出ることによって、「不安と闘い」を味わい、また友や家族にも等しい己の理解者を見だし、さらには故郷の人々とのつながりを感じることもできた。ムツイリにとって、それは初めて真に「生きた」ということでもあった⁽¹³⁾。彼は修道士に向かって「知りたいのか、私が自由の身で／したことを？ 生きたのだ Ты хочешь знать, что делал я / На воле? Жил」(475)と言っている。ムツイリにはこうした生の充足こそが重要なのだ。だからこそ彼にとっては、平穏な修道院も真に生きることを阻む壁、すなわち「牢獄」にはかならず、彼は外の世界で過ごした時を、それが苦難の連続であっても、この上ない「至福の3日間 три блаженных дня」(475)と呼ぶのである。

1-2. 語り手による導入部第2連：「庇護の壁」としての修道院

それに対して、語り手による導入部第2連では、修道院の「壁」はどのように捉えられているだろうか。第2連では、修道院に連れて来られた幼少時から、逃亡が失敗して死にかけているこ

とまで、ムツイリの身に起きた出来事全てが簡潔に語られている。マクシーモフによれば「このような導入部があることで、読者の関心は当然、筋の転換にではなく、ムツイリの体験や描かれることの内的な意味に向けられる」⁽¹⁴⁾という。

しかし第2連で与えられた情報は、その後続くムツイリの告白を読む者を困惑させるものもある。告白の中でムツイリは修道院を「牢獄」と嫌い、外の世界に憧れ続けていたと言っているのに、第2連では洗礼を受けたムツイリが「若い盛りに早くも望んだ／修道士の誓いをたてることを Уже хотел во цвете лет / Изречь монашеский обет」(471)と語られているからだ。С. В. Роминаーゼが述べるように、「局外者の目に「望んだ」ように見えたのではなく、彼[ムツイリ]自身が本当に「望んだ」[強調原文]とされるため、「あるとき突然彼はいなくなった／秋の夜に Как вдруг однажды он исчез / Осенней ночью」(471)という詩行からは、「まるで彼[ムツイリ]を何者かがさらったかのような第一印象」さえ生じうる⁽¹⁵⁾。

ムツイリが「修道士の誓いをたてることを望んだ」と言う語り手は、彼が充実した生への激しい渴望を内に秘めていたことを、捉えきれていないように思われる。なぜなら語り手は主人公とは異なって、修道院での生がどのようなものかには頓着せず、ただ修道院でムツイリの命が助かったことにのみ関心を向けているからだ。

Из жалости один монах	あわれみから一人の修道僧が
Больного призрел, и в стенах	病人の世話をしやり、庇護の
Хранительных остался он,	壁の中にとどまった少年は
Искусством дружеским спасен.	友情ある心遣いによって救われた。

(469)

少年が「友情ある心遣いによって救われた」ことに注目する語り手は、弱ったムツイリを守る「庇護の壁」として修道院を描き出す。こうして、「[作者の]章[語り手による導入部]と主人公の告白では、二つの対照的な修道院の形象が生じる」⁽¹⁶⁾ことになる。

そして、命が救われたことにのみ目を向けるという点において、語り手の価値観は、ムツイリの思いを理解できない修道士のものとなってくる。「ご老人よ！ 私は幾度も耳にした、／あなたが私を死から救ったと Старик! я слышал много раз, / Что ты меня от смерти спас」(472)というムツイリの言葉からわかるように、修道院で彼は何度も、修道士のおかげで命が助かったと教えられている。だがそれに対して、壁の内ですらただ生きのびることに何の価値も見出さないムツイリは、「何のために？ Зачем?」(472)と痛烈に切り返すのだ。この一節は、修道士と主人公では、生に関する価値観が全く異なることを示している。ムツイリは外の世界での充実した生のみを「生」と捉えているのだが、「あわれみから」、つまり全くの善意からムツイリの命を救う修道士

は生と死の区別しか知らず、語り手も同様である。そのため語り手は修道院を、命を保証する「庇護の壁」とみなし、そこからのムツイリの逃亡を突然の不可解な失踪として語るのである。

ただし、修道院を「庇護の壁」とする第2連の語りは、その後の主人公の告白によって否定されるわけではない、ということに注意しておきたい。『ムツイリ』における壁の形象に注目している V. ゴルステインは、「壁は当初は「庇護するもの」として描かれているが、物語詩の他の部分はこの見解を問題視する」とした上で、「庇護の壁は一時的な繁栄と快適さをもたらすかもしれないが、必然的に破壊へと導く」と述べている⁽¹⁷⁾。

だがムツイリの生命を保証するという点では、修道院が「庇護の壁」であることは否定できないだろう。実際、主人公の告白からも、外の世界が死の危険に満ちているのがわかる。例えば嵐の中を修道院から逃亡したムツイリは、翌朝自分が「恐ろしい奈落の縁に на краю грозящей бездны」(477) 寝ていたと知って恐怖を覚えるのだが、その後、水を得るためにその切り立った断崖を命がけで降りることを余儀なくされる。さらに森では豹に遭遇して重傷を負い、最後には太陽の炎熱にさらされて倒れてしまう。そして外の世界で傷ついたムツイリを保護し、看病するのが修道院なのである。しかし逆説的にも、この死の危険に満ちた「不安と闘い」の世界こそが、ムツイリにとっては生の世界にはかならなかった。つまり修道院は、語り手や修道士の価値観に立てば確かに「庇護の壁」であると同時に、主人公からすれば「牢獄」なのだ。

従って第2連の語り手の言葉と主人公の告白については、一方が他方を否定しているのではなく、二つの主張が論争的に対置されているとみなすことができる。もちろん物語世界の外にいる語り手と主人公は直接に論争を行っているわけではないが、前述したように命が保障されることに価値を置く点において語り手は修道士と重なっており、その修道士に対してムツイリが「何のために」と反駁していたことを考えれば、語り手による導入部第2連に対して主人公の告白が反論を提示していると言えるだろう。そして異なる価値観にもとづく二つの語りは、対置されることによって互いを相対化するのである。

1-3. 語り手による導入部第1連：「神の御恵み」、あるいは「牢獄」としての「銃剣の境」

これまで第2連と告白について、修道院の形象に注目して考察してきたが、その結果ロシアによるグルジア併合が肯定的に語られる導入部第1連についても、新たな読解の可能性が開けてくる。これまでしばしば、この第1連はもっぱら政治・歴史的観点から論じられてきた⁽¹⁸⁾。こうした問題の検討はもちろん重要ではあるが、作品内部の構造に目を向ける本稿は、先行研究とは異なるアプローチをとることとする。ここでは『ムツイリ』に現れるもう一つの壁、ロシアのつくる「銃剣の境」に着目し、第2連と同様に第1連の語り手の言葉もまた絶対的なものではないことを示してみたい。

第1連では語り手によって、廃墟となった修道院が描写され、さらにグルジアの併合が語られ

る。グルジア併合をうたった詩行を引用しよう。

И божья благодать сошла	そして神の御恵みがグルジアに
На Грузию! Она цвела	下された！この国はその時から
С тех пор в тени своих садов,	己の庭の影に花咲いた、
Не опасаяся врагов,	敵を恐れることなく、
За гранью дружеских штыков.	友情ある銃剣の境の陰に。

(469)

語り手はグルジアの併合を、「神の御恵みがグルジアに／下された！」と賛美するように語っている。そのため、従来この部分には、レールモントフ自身の併合に対する肯定的な態度が表されていると考えられてきた⁽¹⁹⁾。だが、語り手の言葉をレールモントフ自身の意見と同一視してよいものだろうか。むしろ彼はこの作品において、あらゆる見解を相対化しようとしているように思われる。実際、第2連に対して主人公の告白が反論として置かれていたように、他の部分との関連において第1連を捉えると、第1連の語り手の言葉に対してもグルジアからの反駁が浮かび上がってくるのだ。それを可能にしているのが、ムツイリと修道院の関係と、グルジアとロシアの関係の相似である。第1連では「友情ある銃剣の境の陰に За гранью дружеских штыков」グルジアが「花咲いた」とされており、ロシアが銃剣で壁をつくり、グルジアを敵から隔てている様が語られている。一方、第2連ではムツイリもまた「友情ある心遣い искусство дружеское」によって救われ、「庇護の壁」に囲まれているとされていた。ロシアと修道院が共に、同じ「友情ある дружеский」という語で特徴づけられていることが示すように、ロシア／グルジアと修道院／ムツイリはどちらも、壁で囲む／囲まれるという関係にあると言えよう。

この二つの関係の相似は、先行研究でも指摘されてきた。例えば木村崇は主人公の告白の中に現れる「牢獄の花」の比喩に着目し、この花を介してムツイリとグルジアが重ねられていることを明らかにしている。牢獄の中で孤独に育った花は、ひたすら外の「いのちの光 лучи живительные」に焦がれている。

[...] Таков цветок	[...] 牢獄の花とは
Темничный: вырос одинок	このようなもの。孤独に育ち
И бледен он меж плит сырых,	湿った石畳の間で青ざめ、
И долго листьев молодых	長いこと若葉を
Не распускал, все ждал лучей	伸ばすこともなく、絶えず待ち望んでいる
Живительных.	いのちの光を。

(485)

「牢獄」で育ったと言うムツイリは、自身をこの花になぞらえているのだが、木村は第1連の、グルジアが「己の庭の影に花咲いた」という詩行をとりあげて、ムツイリだけでなくグルジアもこの花に結びついていると指摘する。そして花が求める光は「生そのものである」として、「グルジアはロシアに併合された時から、影の中に、「友情ある銃剣の境の陰に」生きていたのであり、そのためグルジアは真に生きることができなかった」と述べている⁽²⁰⁾。このようにムツイリとグルジアの重なりに注目すれば、ムツイリと同様グルジアも、影の中で生きながらえることよりも、「不安と闘い」の中で真に生きingことを求めているのではないか、ロシアの「友情ある銃剣の境」はグルジアにとっては「牢獄」なのではないか、と考えることができるのだ。

だが同時に、ムツイリの求める「不安と闘い」に満ちた生が、死の危険をはらんでいたことも忘れてはならないだろう。たしかにムツイリは牢獄の花の求める「いのちの光」について、自身が求める生の象徴として語っている。だがこの光は、耐える力のない弱者を容赦なく滅ぼすものでもあった。牢獄で育った花は、外に移されるとすぐに、太陽の光に焼かれて死んでしまう。

Но что ж? Едва взошла заря,	だがどうだ? 朝日が昇るや否や
Палящий луч ее обжег	燃えるような光が焼いてしまったのだ
В тюрьме воспитанный цветок...	牢獄に育った花を……

(485)

そして花と同じくムツイリもまた、「無慈悲な昼の炎 огонь безжалостного дня」(485)に苦しめられ、しまいには倒れてしまう。グルジアに関して、「敵を恐れることなく」という詩行によって、「銃剣の境」の向こうにいる敵の存在が示唆されていた。

第2連の語り手は修道士と同じくムツイリの命が救われたことに目を向け、修道院を「庇護の壁」と評価していたが、同じようにグルジアが敵から守られ存続できることを重視するならば、ロシアのつくる壁、「銃剣の境」もグルジアを「花咲かせる」ことを可能にしたもの、つまり「神の御恵み」をもたらすものとみなしうる。従って語り手の言葉を完全に否定してしまうことはできないだろう。ただし語り手の言葉は二者のうちただ一方の、すなわちロシアの主張を代弁するものと言える⁽²¹⁾。ロシアは存続を脅かす敵からグルジアを守ろうとし、語り手はそれを評価する。第1連でも、第2連と同様に、語り手は壁で囲む側の価値観に立って語っているのである。

第2連に対しては、壁に囲まれる側からの反論としての告白が対置されていたが、第1連に対してはグルジア側からの語りはない。しかし、ムツイリとグルジアの重なりによって、ロシア側の代弁者とも言える語り手に対するグルジア側からの反駁の可能性が示唆される。そして併合を

肯定的に語る語り手の言葉は否定されないものの、その言葉は二者のうち一方の価値観にもとづくものにすぎない、ということが見えてくるのである。

2. レールモントフの創作後期の物語詩に見られる特徴

前章ではムツイリの告白と導入部第2連、そして第1連について、境界としての壁の形象に注目して考察を進めてきた。ここでは前章での検討結果をふまえて、レールモントフの他の後期の物語詩と『ムツイリ』の関連について考えてみたい。前述したように、『ムツイリ』ではロシアがグルジアを、修道院がムツイリを壁によって囲むという関係の相似が見られる。語り手はロシアや修道士といった壁で囲む側と同様に、弱者が死を免れ生きながらえることに価値を置く。そしてロシアの「銃剣の境」はグルジアを「花咲かせ」、「神の御恵み」をもたらすもの、修道院は「庇護の壁」と、壁は恩恵を与えるものと捉えられていた。一方、充実した生のみを求めるムツイリにとって修道院は「牢獄」にはかならず、ムツイリと同様に壁の内に在るグルジアにとっても、ロシアのつくる壁は真の生を阻む「牢獄」であることが示唆される。

このように語り手と主人公は異なる価値観に立っているのだが、ここには先行研究で指摘されてきた、レールモントフの後期創作に見られる特徴が表れているように思われる。これまでの研究では、1830年代後半に書かれた物語詩における登場人物たちの関係のなかに、複数の「真実」が対置されていることが注目されてきた。例えばB.Э. ヴァツロは物語詩『貴族オルシャ Боярин Орша』(1835-1836)のアルセーニーとオルシャを、「意志の強さだけでなく苦悩の深さにおいても互に対等な、つまりレールモントフの考えによれば、倫理的に同等な二人の主人公」[強調原文]⁽²²⁾と捉えている。ヴァツロによれば、彼らは「個人の感情という「真実」と「法、伝統、風習という「真実」、すなわち「二つの対立する「真実」の担い手」⁽²³⁾なのだ。またE.M. プリフリトウッドは、物語詩『デーモン Демон』(1839)のなかで「デーモンの世界」と「タマールの世界」が対置されていることを指摘した上で、この作品に「己の真実、真理を主張する主人公たちの「複数の声」が織りなす「対話」を見いだしている⁽²⁴⁾。

前期のレールモントフの物語詩では、社会からの迫害を受けるアルセーニーや神に敵対するデーモンのような秩序から逸脱する存在が、しばしば物語詩の唯一の主人公となっていた。しかし1830年代後半に入ると、主人公とは反対に秩序に属する存在も、異なる「真実」の担い手となり、互いを相対化するような「二つの対立する「真実」が並置されるようになる。こうした後期の物語詩に見られる特徴は、特に『デーモン』についてはよく指摘されている⁽²⁵⁾。その一方で、主人公の告白が中心となっている『ムツイリ』は、一つの意識をめぐるモノローグ的な物語詩の伝統をしめくくるものとされてきたのだった。

しかし語り手と主人公の語りの対置に着目すると、『ムツイリ』と他の後期の物語詩のつながりが見えてくる。たしかに『ムツイリ』には、『デーモン』で描かれるような、それぞれに己の「真

実」を主張する人物たちのぶつかり合いは見られない。物語世界内において告白を聞く修道士は黙して語らず、響くのは主人公の声だけである。だが『ムツイリ』では主人公の告白に対して、ロシアや修道士と同じ価値観に立つ語り手による導入部が置かれていた。このように一人の人物の告白が作品の中心となっても、二者のうち一方の主張を語り手が代弁することにより、壁で囲む側と囲まれる側の、「二つの対立する「真実」」が提示されているのだ。

こう考えれば、『ムツイリ』に対するこれまでの評価も、見直される必要があると言えるだろう。それでは、語り手が主人公とは異なる「真実」を担う『ムツイリ』は、物語詩としてロシア文学の流れの中でどのような位置を占めているだろうか。以下では、まず『ムツイリ』に影響を与えた作品としてしばしば挙げられる И. И. Козроф の物語詩『修道士 Чернец』(1825) との比較を起点として、従来の物語詩と『ムツイリ』の違いを確認しておこう。

3. 物語詩『ムツイリ』の新しさ：小説とのつながり

コズロフの物語詩『修道士』では、『ムツイリ』と同じように、修道院に入った主人公の告白が作品の大半を占めている。しかし、告白の前におかれた抒情的な語りの部分を見るだけでも、すでに『ムツイリ』との違いは明らかだ。『修道士』の語りは、主人公への同情や共感に溢れており、例えば語り手は悩み苦しむ主人公に対して、「修道士よ、修道士よ、はたしてお前は／かつての夢想を片時も忘れられずにいるのか！……Чернец, Чернец, ужели ты / Всё помнишь прежние мечты!…»⁽²⁶⁾と同情をあらわに呼びかける。プーシキンの南方詩などの詳細な考察を行った В. М. Жилмунスキーは、こうした抒情的な語り方、すなわち「物語に高揚した感情的な彩りを与える手法の体系」⁽²⁷⁾を、ロマン主義的物語詩というジャンルの特徴とみなしている。

そして主人公に感情的に寄りそう語りは時として、マンが「ロマン主義的物語詩の構築上の原則」と呼ぶ、「作者 [ここでは語り手を指す] と中心人物の体験の共通性とパラレリズム」という現象を生じさせる⁽²⁸⁾。『修道士』では、献詞において語り手の「私」が「わが修道士のように、若い熱情の全てを／胸の内に私はとうに葬り去った Как мой Чернец, все страсти молодые / В груди моей давно я схоронил」⁽²⁹⁾と、主人公と同じ内的体験を経ていることを語っていた。こうしたパラレリズムによって語り手と主人公の語りは共鳴し合い、「ロマン主義的内容の普遍性と包括性」⁽³⁰⁾が生み出されることになる。

一方『ムツイリ』では、語り手は主人公の生涯を淡々と語り、彼に対して同情や共感に満ちた言葉を向けてはいない。そればかりでなく語り手は、主人公を理解できない修道士の価値観に立ち、その語り手は主人公の告白が提示する「真実」を相対化するのである。語り手が主人公の意識に寄りそい、主人公が十分に客観化されないという点で、『修道士』のような従来の物語詩には抒情詩との近さが表れているが、『ムツイリ』はそうした物語詩とは一線を画していると考えられる。

とはいえ『ムツイリ』の内に、A. H. ソコロフのように「客観的叙事詩的傾向」⁽³¹⁾を見出すこともできないだろう。ソコロフは「レールモントフが抒情的な叙述の手法から離れ、プーシキンの叙事詩的な詩『青銅の騎士』や『ポルタワ』でつくり上げられた叙事体の形式を取り入れていく」⁽³²⁾ことの例として『ムツイリ』の第2連を取り上げ、『修道士』と比較しつつ『ムツイリ』には「客観的な語りの簡潔さ」⁽³³⁾が表れていると述べる。だが本稿で考察してきたように、この第2連の語りが修道士と同じ価値観にもとづいており、主人公の告白がそれに対する反論となっていたことを考えれば、叙事詩的な客観性に近づいているとも言い難い。

むしろ『ムツイリ』は、互いを相対化するような複数の語りが対置されるという点で、レールモントフが同時期に取り組んでいた小説『現代の英雄 Герой нашего времени』(1838-1839)を思い起こさせる。語り手による導入部に続いて主人公の告白が始まる『ムツイリ』と同様に、『現代の英雄』では最初にマクシム・マクシームイチが、次にカフカースを旅する「私」がペチョーリンについて物語った後に、ペチョーリンの手記が始まる。このような構成は一見、この人物を立体的に浮かび上がらせることを可能にするものと思われるが、実際には複数の語り手による語りは統一的なペチョーリン像をつくりあげるところか、読者を混乱させてしまっている。

例えばマクシム・マクシームイチは、ペチョーリンを「とても変わったところのある人だった」(189)⁽³⁴⁾と評し、何事にも退屈してしまうという彼の告白について、「25歳の人間からこんなことを聞いたのは初めて」(210) だと言う。だが首都の様子に通じており、「退屈」が一つのモードだと知っている「私」は、「同じようなことを言う人は多い」(210) と、そのような人物がありふれていることを仄めかしている。あるいはまた、マクシム・マクシームイチは「必ずや人を同意させてしまう人」(199)、「思い立ったら後に引かない」(211) という、反対されても自分の意志を断固として押し通すペチョーリンの姿を伝え、「きっと子供の時に母親に甘やかされたんでしょう」(211) と推測している。一方ペチョーリン自身は「生まれて行動するようになって以来、運命はなぜかいつも、私を他人のドラマの大詰めに導いていったのだった」(272) などと、自分の意志ではなく心ならずも運命にふりまわされてきたことを、しばしば悲劇的な調子で語っているのだ。

これは一例だが、『現代の英雄』では3人の語り手がそれぞれの観点から一人の人物を描き出しており、彼らの語るペチョーリン像は時に矛盾をはらむものとなっている。これは、複数の語り手が己の「真実」にもとづいて語った結果とも言えるだろう⁽³⁵⁾。そして作品全体を通じて統一的な主人公像は示されず、読者に与えられるのは「互いに至極緊密に関連づけられてはいないような、幾つかのかなり異なるペチョーリンたちという万華鏡」⁽³⁶⁾なのだ。A. バラットとA. D. P. ブリッグスは、『現代の英雄』のこうした語りの特徴について、「三人称の語り手を全くなくし、それぞれが部分的にしか権威を持っていないような様々な観点から彼の物語を提示することにより、レールモントフはポリフォニックの手法のしるしである開かれた状態を獲得している」⁽³⁷⁾と論

じ、この作品をドストエフスキーの小説の先駆として位置づけている。

一方『ムツイリ』の語り手は物語世界の外に位置するが、ロシアや修道士の側に立つという点で、やはり「部分的にしか権威を持っていない」とみなしうる。そして語り手は、壁を死の危険から守り恩恵を与えるものとして語るのだが、同時に主人公の告白は、壁の内に在る者にとって壁は真の生から隔てる「牢獄」でしかないことを示すのである。

もちろん、『ムツイリ』と『現代の英雄』は完全に重なるわけではない。例えば、『ムツイリ』において修道院は二つの価値観から捉えられていたが、語り手が評価するロシアの「銃剣の境」については、グルジアの主張は明示されていなかった。だが、いまだ十全な形ではないものの、『ムツイリ』の多重化した語りのあり方からは、作品をモノローグ的に閉じることを回避する志向、すなわち『現代の英雄』で実現したような「開かれた状態」への方向性が見えてくる。この物語詩では、語り手と主人公はそれぞれ異なる「真実」を主張し、主人公の告白だけでなく、語り手による導入部の語りもまた相対化されるのである。こうした語りの特徴によって、『ムツイリ』は抒情詩や叙事詩よりも、小説（『現代の英雄』）に近づくのであり、小説の時代にふさわしい新しさを持った物語詩となっている。

おわりに

前述したように、『ムツイリ』が創作された時にはすでに、ロマン主義的物語詩は過去のものとなりつつあり、小説の時代が訪れようとしていた。そのような時に、小説『現代の英雄』と時期を同じくして、自由を求める青年の情熱的な告白を中心とする物語詩『ムツイリ』が書かれたことは、一見時代の流れに逆行しているようにも思われる。

だが『ムツイリ』においては、主人公の告白だけではなく、語り手による導入部にも目を向けなければならない。この作品の独自性は、導入部と告白が対置され、語り手と主人公が異なる価値観に立っている点にある。レールモントフの他の後期の物語詩では、二人の中心人物が二つの「真実」を主張していたが、『ムツイリ』では語り手が主人公とは対立する「真実」の担い手となっているのだ。そして、コズロフの『修道士』など従来の物語詩とは異なって、『ムツイリ』では語り手と主人公の語りが互いを相対化しており、本稿ではこうした語りの特徴の考察を通して、『ムツイリ』と『現代の英雄』のつながりを見出した。

従来の研究では主として主人公の告白に焦点が当てられ、『ムツイリ』はそれ以前の物語詩の伝統を完結させているが、新しさを持たない作品とみなされてきた。しかし伝統を受け継ぎながらも、小説の時代の訪れを反映した物語詩として、『ムツイリ』を捉え直すことができるのではないだろうか。

注

- (1) レールモントフの創作はふつう、前期：1828-1834年、後期：1835-1841年という二つの時期に区分される。創作区分については次の研究に詳しい。Максимов Д.Е. Поэзия Лермонтова // М.Ю. Лермонтов. Полное собрание стихотворений: В 2 т. Т. 1. Стихотворения и драмы. Л., 1989. С. 16.
- (2) Белинский В.Г. Полное собрание сочинений: В 10 т. Т. 1. М., 1953. С. 261.
- (3) Мелихова Л.С., Турбин В.Н. Поэмы Лермонтова. (Опыт анализа жанрового своеобразия художественного произведения). М., 1969. С. 40.
- (4) 例えば Б. М. Эйхенбаумはこの物語詩について、「彼 [レールモントフ] の創作史においてもロシア詩の歴史においても、『ムツイリ』は新たなジャンルではなく、また新たな道を開いてはいない」としている。Эйхенбаум Б.М. Лермонтов : Опыт историко-литературной оценки. Л., 1924. С. 92.
- (5) Фохт У.Р. Лермонтов. Логика творчества. М., 1975. С. 95.
- (6) Манн Ю.В. Русская литература XIX века: Эпоха романтизма. М., 2007. С. 250.
Д. Е. Макシーモフも Ю. В. Маннと同様に、この二作品を『ムツイリ』の「プロトタイプ」とみなしている。Максимов Д.Е. Поэзия Лермонтова. М.; Л., 1964. С. 187.
- (7) Robin Aizlewood, "Geroi nashego vremeni as Emblematic Prose Text" in Arnold McMillin, ed., *From Pushkin to Palisandriia: essays on the Russian novel in honor of Richard Freeborn* (London: University of London, 1990), p. 39.
- (8) 先行研究でも、修道院が詳しく描写されていないことは指摘されているが、そこに意義は見出されてこなかった。Макシーモフは修道院に具体性が与えられない理由を、「物語詩の熱情は生を詩化することであり、[...] 修道院・牢獄を示すことにはない」ためとしている。Максимов. Поэзия Лермонтова. С. 189.
- (9) Махов А.Е. «Есть что-то, что не любит ограждений»: Библейская доктрина границы и раннеромантический демонизм // Вишневская Н.А., Сапрыкина Е.Ю. (ред.) Темница и свобода в художественном мире романтизма. М., 2002. С. 28.
- (10) 『ムツイリ』の引用は全て、Лермонтов М.Ю. Полное собрание стихотворений: В 2 т. Т. 2. Стихотворения и поэмы. Л., 1989. により、括弧内に頁数を記す。訳は引用者によるが、池田健太郎、大橋千明訳（『レールモントフ選集Ⅱ』（光和堂、1976））、および一條正美訳（『ムツイリ・悪魔』（岩波書店、1951））を参照した。
- (11) Манн. Русская литература XIX века. С. 240.
- (12) Маннは、「動物たちも人間と親しくなることを喜んでおり、そして全ての生けるものを分かち壁は、両方の側からもろくなっているようである」と述べている。Манн. Русская литература XIX века. С. 241. このように、外の世界には孤独をつくりだす壁はないとも言えるだろう。
- (13) Э.Э. Найджичは「ここ [豹との闘いの場面] では [...] 闘いのスチヒーヤが、困難の克服が、勇敢さが讃えられている」とし、『ムツイリ』において「これは人間の最も重要な資質、生の最も重要な属性」とされている、と述べている。Найдич Э.Э. О поэме М.Ю. Лермонтова «Мцыри» // Трушкин В.П. (ред.) Творческий процесс и эстетические принципы писателя: Сб. научн. тр. Иркутск., 1980. С. 7-8.
だがこれまで見てきたように、闘いに加えて、その最中で他者との結びつきを実感することも、ムツイリの目指す生には欠かせない。
- (14) Максимов. Поэзия Лермонтова. С. 224.
- (15) Ломинадзе С.В. Поэтический мир Лермонтова. М., 1985. С. 215.
- (16) Ломинадзе. Поэтический мир Лермонтова. С. 214-215.
- (17) Vladimir Golstein, *Lermontov's narratives of heroism* (Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 1998), p. 164. なおゴルステインは、第1連で描かれる修道院の廃墟も念頭に置いている。だがこの廃墟の描写は壁の破壊的な性格を示すというよりも、マンの指摘するように、全てをのみこむ永遠の時の流れを表していると考えられる。Манн. Русская литература XIX века. С. 249.

- (18) 例えば次の研究を参照のこと。Андроников И.Л. Лермонтов. Исследования и находки. М., 1977.
- (19) 上記の研究において И. Л. Андрониковは、レールモントフが併合を「不可避で歴史的に進歩的な出来事」とみなしていることがわかる、と主張する。Андроников. Лермонтов. Исследования и находки. С. 305.
- (20) Кимура Т. Грузинский вопрос в поэме М.Ю. Лермонтова “Мцыри” // Japanese Slavic and East European Studies. 1982. Vol.3. С. 67.
- (21) 木村は第1連における「我々のために祈る修道士たち Молящие иноки за нас」(469) という詩行に注目して、語り手はロシア人であるとしている。Кимура. Грузинский вопрос в поэме М.Ю. Лермонтова “Мцыри”. С. 64.
- (22) Вацуро В.Э. О Лермонтове: Работы разных лет. М., 2008. С. 548.
- (23) Вацуро. О Лермонтове. С. 548.
- (24) Пульхритудова Е.М. Романтизм в русской литературе 30-х годов XIX в.: Лермонтов // История романтизма в русской литературе: Романтизм в русской литературе 20-30-х годов XIX в. (1825-1840) . М., 1979. С. 322.
- (25) ブリフリトゥードワの他には、例えばマクシーモフが、『デーモン』ではデーモンと「天」、双方の真実が示されている、と述べている。Максимов. Поэзия Лермонтова. С. 85.
- (26) Козлов И.И. Полное собрание стихотворений. Л., 1960. С. 316.
- (27) Жирмунский В.М. Байрон и Пушкин: Пушкин и западные литературы. Л., 1978. С. 92.
- (28) Манн. Русская литература XIX века. С. 185. マンは「作者」としているが、直前には『修道士』の献詞における「私」について述べており、「語り手」と捉えてよいと思われる。
- (29) Козлов. Полное собрание стихотворений. С. 313.
- (30) Манн. Русская литература XIX века. С. 185.
- (31) Соколов А.Н. Очерки по истории русской поэмы XVIII и первой половины XIX века. М., 1955. С. 615.
- (32) Соколов. Очерки по истории русской поэмы. С. 612.
- (33) Соколов. Очерки по истории русской поэмы. С. 613.
- (34) 『現代の英雄』の引用は、Лермонтов М.Ю. Собрание сочинений: В 4 т. Т.4. Л., 1981. により、括弧内に頁数を記す。訳は引用者によるが、中村融訳（『現代の英雄』（岩波書店、1981））および川端香男里訳（『世界文学全集27』（講談社、1979））を参照した。
- (35) さらに『現代の英雄』の場合、3人の語り手が信用できないという問題が生じており、それぞれの「真実」には疑わしさがつきまとうことになる。例えば次の研究を参照のこと。山路明日太「レールモントフ『現代の英雄』——言説の疑わしさを追って——」、『スラヴ学論叢：北海道大学文学部ロシア語ロシア文学研究室年報』第5-2号（2001）。
- (36) Andrea Lesic-Thomas, “Focalization in Pushkin’s Eugene Onegin and Lermontov’s A Hero of Our Time: Loving the semantic void and the dizziness of interpretation,” *The Modern Language Review* 103, no. 4 (2008): p. 1078.
- (37) Andrew Barratt and A. D. P. Briggs, *A Wicked Irony: The Rhetoric of Lermontov’s ‘A Hero of Our Time’* (Bristol: Bristol Classical Press, 1989), pp. 130-131.